

支部だより

四国支部からのたより

1. 四国支部より

去る平成19年6月16日(土)、香川県さぬき市の徳島文理大学・香川キャンパスにて、記念すべき日本生物物理学会・第1回四国支部大会が開かれました。当日はお忙しい中、生物物理学会・次期会長の曾我部正博先生にもご足労頂き、総勢23名の参加者のもと、18件の研究発表がなされました。また、発表後の懇親会は手作り感漂うアットホームな会となり、参加者は自己紹介や研究に関するディスカッションに興ずることとなりました。なお、同じく発表後には総会が開かれ、各役員を選出や第47年会会の企画運営を四国支部でお引き受けすることが決定しました(2009年10月末、徳島にて開催予定)。

このたびの四国支部発足に際しまして、当日の発表プログラム(下記参照)を見てもわかる通り幅広い研究分野の先生方にご参集頂くことができ、四国支部は大変順調なスタートを切ることができました。今後のますますの発展のため、引き続き支部会員各位および生物物理学会のご支援を願う次第です。



桐野豊支部長ご挨拶

○四国支部役員 支部長:桐野豊(徳島文理大学), 役員:篠原康雄(徳島大学), 大西浩平(高知大学), 伊藤悦朗(徳島文理大学・香川キャンパス), 北村美一郎(徳島文理大学・香川キャンパス)

第1回四国支部大会プログラム

モノアラガイ味覚嫌悪学習にともなうセロトニントランスポーター遺伝子発現

○定本久世, 伊藤悦朗(徳島文理大・香川葉)

進化分子工学を用いた細菌アラニンラセマーゼの高機能化

○大西浩平, 鞠建松, 味園春雄(高知大・総合研究センター)

糸状菌の先端成長における微小管の必須な役割

○堀尾哲也¹, 紅朋浩², Berl R. Oakley³(¹徳島大・院・ヘルスバイオサイエンス, ²名大・院・医, ³Ohio St. Univ.)

ミトコンドリアからのシトクロムc放出機構の解明に向けて

山本武範¹, 山田安希子^{1,3}, 吉村勇哉^{1,2}, 山下菊治³, 寺田弘⁴,

○篠原康雄^{1,2}(¹徳島大・ゲノム機能研究センター, ²薬, ³歯, ⁴東京理科大・薬)

土壌菌L-ラムノースイソメラーゼの触媒部位におけるMn²⁺の動き

○神鳥成弘¹, 吉田裕美¹, 山田貢¹, 山地理嗣², 石井知彦³, 高田悟郎³, 何森健³, 中村暢文⁴(香川大¹総合生命科学研究センター・医, ²工, ³希少糖研究センター・農, ⁴東京農工大・院)

カチオン性ポリペプチドの脂質二分子膜透過

○植野哲, 嶋林三郎(徳島大・院・ヘルスバイオサイエンス)

タンパク質複合体の構造と機能解析

○津下英明, 今川貴仁, 宇都宮敬子(徳島文理大・健康科学研)

脂質二分子膜相転移の熱力学的研究

松木均(徳島大・院・ソシオテクノサイエンス)

タンパク質の超高感度定量測定法の開発

伊藤悦朗(徳島文理大・香川葉)

生体モデル膜と麻酔薬の相互作用に関する研究—麻酔薬の膜への分配に関する観点から—

○秦隆志¹, 長山和史¹, 戸部廣康¹, 岡林南洋¹, 山崎奈穂², 佐竹弘³, 西本真琴⁴, 松木均⁴, 金品昌志⁴(¹高知工業高専・物質工学, ²奈良先端科学技術大学院大・物質創成科学, ³徳島大・産学官プラザ, ⁴徳島大・院・ソシオテクノサイエンス)

ナメクジの嗅覚情報処理におけるGABAの役割

小林卓(徳島文理大・香川葉)

膜電位光学計測による神経情報演算機構の研究

○富永貴志^{1,2,3}, 富永洋子¹(徳島文理大・香川葉¹, 神経科学研², 理研・脳センター³)

ホヤによるシステム生物学の構築

津田基之(徳島文理大・香川葉)

クロコオロギの闘争行動におけるNOシグナル伝達系と脳内アミンレベルの連関

村上準(徳島文理大・香川葉)

マウス瞬目反射学習におけるNOの役割

○北村美一郎, 桐野豊(徳島文理大・香川葉, 神経科学研)

肥満モデルマウスの瞬目反射条件付け学習におけるカンナビノイドの関与

○窪田剛志, 桐野豊(徳島文理大・香川葉)

ヒスタミンH1受容体脱感作異常を示す遺伝子改変マウスの作製

○堀尾修平¹, 三宝誠², 平林敬浩³, 八木健³, 高浜洋介⁴, 福井裕行¹(¹徳島大・院・ヘルスバイオサイエンス, ²生理研・行動・代謝分子解析センター, ³大阪大・院・生命機能, ⁴徳島大・ゲノム機能研究センター)

遺伝子発現制御マウスを用いた瞬目反射条件付け学習の解析

○岸本泰司^{1,2}, 桐野豊¹(¹徳島文理大・香川葉, ²大阪大・医)



発表のようす



会場のようす

2. 支部会員の声 —第1回支部大会に参加して—

当日の各演題の内容は多彩で、わたしには内容のすべてを理解し具体的なディスカッションをすることは困難でしたが、活発な議論が行われ、興味深く拝聴することができました。四国支部の第1回大会であることをふまえ、発表内容は自己紹介、およびラボや所属機関の紹介を含めたものが多く、四国における生物物理学研究の“流れ”のようなものを学んだ気持ちになりました。優れた研究に触れ、よい勉強になりました。個人的には、津田基之先生がホヤの視覚と行動に

関するご自身の研究をまとめて話されたのが印象的でした。会に引き続き総会が執り行われ、次回の大会開催地（高知）が決定されました。懇親会では、来賓の曾我部次期会長を囲んで和やかに語らい、最後までよい雰囲気でした。少数かつ幅広い分野にわたる集まりですが、同じ生物物理学学会のメンバーであることを相互に確認し、研究の内容を相互に理解し、四国支部会の第一歩をよい感じで踏み出したと思いました。

（徳島文理大学香川薬学部 小林卓）